

叡山文庫蔵 『降魔大師縁起』 翻刻と解題

畑 中 智 子

一、はじめに

第十八代天台座主慈恵大僧正良源は、比叡山を繁栄に導き、中興の祖といわれる人物である。良源は寂後まもなくより信仰の対象となり、慈恵大師・元三大師・降魔大師などと称され、中世期から近世期にかけて多くの画像や護符が作られるまでになった。江戸期成立の良源伝『東叡山寛永寺元三大師縁起』（胤海著、延宝八年、一六八〇成立。以下『元三大師縁起』）には、比叡山横川四季講堂と上野寛永寺に所蔵されている慈恵大師画像について、その由来が記されている。加えて、同縁起には、慈恵大師画像に関する、次の記述がある。

むかしより図画せし靈像あまた侍る中に。竹林の影像是。眉毛を五采の内にぬき出し給ふ。この御まみ毛。がまの相にて。衆魔をそれけるとぞ。さによりこれを降魔の大師の影像といひける。蔵林にしては。ほろほろとおつる木の葉のちりくるを。あさぎよめする人なきに。をのづからはらはせたまふ。これぞ今に。木葉の御影と名づけける。降魔は本院北谷。木葉は同院東谷。蔵林の旧跡に今安置したてまつれり（続天台宗全書 史伝2、二四九頁）

この記述から、『元三大師縁起』成立時には、「本院北谷」の竹林院に所蔵される「降魔の大師」・「同院東谷。蔵林の旧

跡」に安置される「木葉の御影」と呼ばれる画像が、比叡山に存在したことがわかる。

叡山文庫に所蔵される『降魔大師縁起』は、これらの内、比叡山東塔北谷竹林院に伝わった、慈恵大師画像「降魔の大師」に関する縁起である。同書には、良源の画像に関する靈驗談が記されており、近世期における説話や慈恵大師信仰の有り方を知る上で、貴重な資料と考える。しかし、同書については、これまで、村山修一氏が、良源に関する絵巻について語る中で、一部触れられている他には、関心が向けられることがなく、今なお未翻刻の状態にあるようである。そこで本稿では、同書について概説し、翻刻・対校を行う。なお、本縁起の成立や内容に関する検討については、稿を後に譲る。

二、書誌と本文の概略

『降魔大師縁起』は『国書総目録』によると、伝本は叡山文庫に所蔵される写本のみで、卷子本と冊子本の二本が現存する^②。今回は卷子本、冊子本両方の閲覧が許可された。卷子本には「天台座主二品判親王書」、冊子本には「天台座主二品親王書」と署名があることから、両書ともに、天台座主二品親王（堯延）書写の本であることが知れる。しかし、卷子本では、押印のあるべきところに「判」とのみ記され、押印を欠く。卷子本の記述から、真筆本には押印があったと推測できる。卷子本には押印がなく、冊子本にも又、押印が見られないことから、現存の両書は真筆ではなく、恐らく転写本ではないか、と考える。卷子本をA、冊子本をBとして書誌の概略を次に示す。

A、写本 一軸 叡山文庫（請求番号 奥田内典9—6—16）

【外題】^{北谷} 降魔大師縁起（打付書・外題の下に「前大僧正堯憲記」とある。）

【内題】 降魔大師縁起

【法量】 表紙 28・0×21・5糎

表紙ともに全長、575・0糎

【蔵書印】なし

B、写本 一冊 叡山文庫（請求番号 無動寺内典42—16—1266）

【外題】降魔大師縁起（打付書）

【扉題】降魔大師縁起

【内題】降魔大師縁起

【法量】20・7×13・4糎

【綴じ方】袋綴

【丁数】表紙を除いて、全十六丁（扉を含む。）

【本文】每半丁五行

【蔵書印】①表紙・扉表に陽刻黒長方印 「山門無動寺蔵」（7.6糎×1.5糎）

②扉裏に陽刻朱正方印 「沙門真超」（4.1糎×4.1糎）

A本・B本の本文（翻刻を後掲）は、数ヶ所字句が異なるのみで、ほぼ同文である。但し、B本の本文には、見せ消で字句の訂正がされている箇所や、小字で字句が挿入されている箇所、振り仮名が付されている箇所が見え、校訂が加えられている。

両本で大きく異なる点は、絵の有無に関する記述である。後述するが、B本には「住吉法眼具慶末弟、長谷川常貞図」と奥書にある。加えて、本文中にも「此間絵あり」等と、絵の位置が明示されている。このことから、B本自体に絵の収載はないが、B本の元となる『降魔大師縁起』には、絵が収載されていた可能性が示唆される。それに対し、A本には、

絵に関する奥書や注記が見えない。但し、A本では、絵の挿入が予測される部分に、約一行分の空白がある。当該部分は、後掲した翻刻の16・38・47・65・103・118行目であり、A本の空白部分は、概ねB本の絵に関する注記と一致する。しかし、28行目のみは、B本に「此間に絵あり」と注記のある箇所³に、A本では空白が見られない。なお、118行目の空白については、空白の箇所が内容と奥書の間ということもあり、絵が入る所であるから空白になっているのか、内容と奥書を区別する為の空白であるのか、判断がつきにくい。

さて、絵に関する記述がA本にはなく、B本にのみ存在するのは何故か。まず、A本とB本が、異なる本を元に書写した可能性が示唆される。つまり、A本が詞書のみで構成された本を、B本が絵の収載された本、又は絵に関する注記のある本を親本としたことが考えられるのである。しかし、A本がB本と親本を同じくしながらも、絵には関心を示さず、詞書のみを書写を目指した可能性も否定できない。

又、A本とB本において、絵の挿入が予測される位置が、一部不一致であるということは、何を意味するのだろうか。これについては、詞書部分と絵画部分が別々に制作され、詞書の作者が、絵の挿入を予測して、当該部分に空白をあけた、ということが考えられる。絵画部分が完成していなかった為に、空白の位置が、完成した絵巻の絵の位置と一致しなかったのではないか。A本が、このような絵巻完成以前の本を親本とした可能性も考えられようか。

以上、A本・B本の相違点に関して、諸々の見解を述べた。しかし、現時点では、伝本がA本・B本の二本に限られており、これらの問題について明確な答えを出すことはできない。

三、奥書の検討

A本・B本の奥書について、検討する。両書の奥書は、次に示す通りである。なお、先にも述べたが、奥書1について

は、B本にのみ記述がある。

1 住吉法眼具慶末弟、長谷川常貞図。

2 右縁起の趣ハ、先達のかたり伝へしとて、最順已講口説也。最順は、重順直弟俗姓の甥にて、平生その言談に熟せり。重順ハ、江州蒲生郡古川村木村氏某云々。

3 今年冬十月、最珍法印勸発により、鄙語をつゝり一卷となす。堯憲はしめ竹林院兼帯任職三十年におよへり。芳縁くちす、今此挙にあつかる。願はくは、此功にこたへて、慈惠鏡（饒力、畑中注）潤冥願の利益に預らん事を。穴賢。

宝永三年十月。前大僧正堯憲。降魔大師縁起一卷、依衆望満禿毫畢。

4 宝永四年二月三日。天台座主二品判親王書。（句読点畑中）

奥書1からは、『降魔大師縁起』には絵の部分が存在し、その絵は住吉派の絵師である、住吉具慶の末弟、長谷川常貞の作であったことが知れる。この事に関連して、『降魔大師縁起』成立より以前に、天台宗の高僧と住吉派の絵師、という組合せで縁起絵巻が製作されており、注目される。これらについては、榊原悟氏に研究があり、日光東照宮の縁起である『東照宮縁起』（住吉如慶・具慶画、延宝七年、一六七九、日光へ奉納）や、先に述べた『元三大師縁起』（住吉具慶画、延宝八年、一六八〇成立）、『元三大師縁起』と一対をなす『東叡山開山慈眼大師縁起』（住吉具慶画、延宝八年、一六八〇成立）が取り上げられている。又、氏は天台僧と住吉派の絵師との関係について、次の如く述べる。⁴

即ち如慶以来、天台門徒の住吉家は、妙法院堯然（一六〇一〜六一）堯恕両法親王をはじめとして、天海、青蓮院尊純など、主に天台系の高僧たちとの親しい交流とそのバックアップとによって、活動基盤の確立や一門の伸長を図ってきた。

『降魔大師縁起』も奥書によると、天台宗の高僧（前大僧正堯憲）と住吉派の絵師（長谷川常貞）によって製作されたと

あり、時代は多少下がるが、榊原氏の挙げられている縁起絵巻と、同じ流れの中に位置付けられようか。

奥書2には、『降魔大師縁起』の内容が、先達の語り伝えたもので、最順已講の口説、とある。最順は、奥書に「重順直弟俗姓の甥にて、平生その言談に熟せり。」とある如く、重順の直弟子で血縁関係もあり、普段から重順の言談に接していたことが知れる。重順は、『降魔大師縁起』中に、降魔大師の靈驗を受ける人物として描かれている。奥書2の、最順が重順の直弟子であり、重順の言談に近く接していたという記述は、本縁起の内容に信憑性を与える。なお、重順、最順については、『東塔五谷堂舎並各坊世譜』（天台宗全書第二十四卷、天台宗典刊行会編、第一書房、昭和四十九）に次の記述がある。

竹林院 檀那流名室

第一世権大僧都法印重順。亦称長順。当国蒲生郡人。青木氏。天正二十年壬辰為造営妙見堂及日吉三宮之願主。又建不動慈光善光三坊。慶長十二年丁未退隱紀州吹上。便建立一寺。名明王院為其開基。元和二年丙辰十月十五日逝

（七十七頁）

不動院

第一世第二世並称明王院

第一世権大僧都重順。元和二年丙辰十月十五日逝。具如竹林院記

第二世権僧正最順。当国蒲生郡古川人。青木氏。重順弟子。為北嶺行者葛川大大先達。補和州吉野山学頭任権僧正。

正保元年甲申補執行代（任監八年）。同四年丁亥九月為法華會講師。延宝五年正月五日逝。寿八十有五。

（七十八頁）

右の記述では、奥書に「木村氏某」とある重順の氏姓について、「青木氏」（網かけ部）とあり、記述の異なる点が見え

る。しかし、蒲生郡（古川）出身であること、重順と最順が師弟関係にあること、最順が已講と呼ばれるに相当する法華会の講師を務めていること等が明らかにされており（傍線部）、概ね本縁起奥書を裏付ける記述となっている。

奥書3・4には、宝永三年（一七〇七）十月に最珍が発起し、堯憲が『降魔大師縁起』一卷を書き終え、翌宝永四年（一七〇八）に天台座主二品親王（堯延）が書写した、とある。最珍については、『東塔五谷堂舎並各坊世譜』北谷蓮華院の項に、次の記述が見える

第六世大僧都豪玄。本名最珍。本州蒲生郡古川人。青木氏。最順弟子。後為豪珍弟子。天和三年癸亥入院。元禄十六年癸未七月任大僧都。宝永三年丙戌移住阿州松厳寺。宝永四年丁亥八月十日於阿州逝（八十四頁）

右の記述によると、最珍は重順・最順と同族で、最順の弟子であることがわかる。このことから、『降魔大師縁起』に語られる逸話は、氏姓を同じくし、師弟関係にある、重順から最順へ、最順から最珍へと語り継がれた逸話であった、と推測できる。

次に、堯憲については、『東塔五谷堂舎並各坊世譜』に、次の通り「竹林院第四世」とある。

（竹林院）第四世探題大僧正堯憲。東園大納言家息盛憲弟子。初住大佛日嚴院。明暦元年乙未兼住当坊。万治三年庚子兼談山学頭。同四年甲辰任権僧正。寛文十一年辛亥六月擢新題者。同十二年壬子転為僧正。延宝八年庚申為大僧正（七十七頁）

奥書3には、「堯憲はしめ竹林院兼帯住職三十年におよへり。」という記述が見える。右記述の傍線部には「明暦元年乙未兼住当坊。」とあり、堯憲が竹林院第四世に就任したのは、明暦元年（一六五五）であることが知れる。又、『東塔五谷堂舎並各坊世譜』によると、竹林院第五世は貞享二年（一六八五）に就任しているので、奥書の「兼帯住職三十年」という記述は正確であることがわかる。

以上の検討から、『降魔大師縁起』は、重順↓最順↓最珍と伝えられた逸話を、堯憲が竹林院住職を務めた縁で一巻にまとめた、という状況が考えられる。

さて、奥書4に名前の見える、本縁起を書写した堯延は、第一八九・一九一・一九三代天台座主を務めた人物である。堯延については、『天台座主記』（渋谷慈鑑編、昭和四十六、五四三頁）に「靈元院第六皇子、母管中納言局庸子（五條大納言為庸卿女号少将内侍）、堯恕親王弟子」とある。この記述から、堯延が堯怒の弟子であることがわかる。

ちなみに、先に述べた堯憲も、堯延の師である堯恕に近く仕えていた。堯恕は『堯恕法親王日記』（妙法院史料第一巻）三巻、妙法院史研究会編、吉川弘文館、昭和五十一〜五十三）を残しており、その中には、しばしば「堯憲」・「日嚴院（堯憲の別称）」・「玄、院（同）」の名が見え、堯憲と堯恕が公私ともに親しく接していた様子が知れる。例えば、両者の親交を示すものとして、修学院離宮への遊覧に同行した記事、堯恕と堯憲が花の散る様を見て、共に詩を賦すという記事、黒谷居氏の庭の牡丹鑑賞に同行した記事、茸狩りに同行した記事等が挙げられようか。

十五日、微雨、下山、直二修学院離宮、終日遊覧、堯憲僧正・房純僧正・興亨安・村友佳・伊宗恕・尾玄真・井養伯・沢玄竹・最仙闍梨等来、入夜帰新日吉房、
（寛文六年三月十五日条、妙法院史料第一巻、一五六頁）

廿九日、寺前之花翻々飛、于時予与堯憲僧正賦、三月尽見落花之一絶、詩載逸堂草稿、

（寛文六年三月廿九日条、妙法院史料第一巻、一五七頁）
廿五日、日嚴院僧正・祖岸禪師等同道二て、黒谷居氏可入と云者ノ庭ノ牡丹ヲ見ル、この者当世ほとんつくりの名譽也、
（延宝七年三月廿五日条、妙法院史料第二巻、一〇三頁）

七日、豊国山たけかり、玄、院・祖岸・法国寺等同道也、
（元禄四年九月七日条、妙法院史料第三巻、一六七頁）

以上の通り、堯恕と堯憲はごく親しい関係にあった。そのような繋がりからか、堯憲と堯延が同席した、という記事も

『堯恕法親王日記』には見える。次に、その一例を示す。

廿六日、新宮（堯延）論義始、玄、院・日嚴院・智明房・実境房・小侍従・卿公・大式・本行房等也、講師金剛院、論題元品能治、（下略）
（元禄六年正月二十六日条、妙法院史料第三卷、二三八頁）

四日、於本房有論義、解塵得道、講師小侍従、難者予、新宮・玄、院前大僧正・日嚴院・金剛院・智明房・実境坊・本行坊・卿公、
（元禄六年八月四日条、妙法院史料第三卷、二六二頁）

※括弧内の人名注記は畑中が付した。

なお、『堯恕法親王日記』には「降魔大師に詣でる」・「降魔大師七日参籠を行う」など、慈恵大師信仰に関わる記述が散見される。一例を挙げると、次の通りである。

八日、東塔北谷降魔大師法会為施物料白銀五百両令寄進畢、予依有所願也、
（寛文四年七月八日条、妙法院史料第一卷、三十四頁）

三日、北谷慈恵大師講、予出座、会場恵光坊、論題無始無明厚薄、
（寛文五年九月三日条、妙法院史料第一卷、一四〇頁）

十七日、從今日降魔大師七日参詣始之、例年如此故也、（以下略）

（寛文六年八月十七日条、妙法院史料第一卷、一六七頁）

廿七日、晴天、登山、卯刻出門登不動坂、先北谷降魔大師参詣、（以下略）

（貞享三年三月廿七日条、妙法院史料第二卷、五〇三頁）

三日、登山、寅刻出門、（中略）午刻降魔大師・根本中堂等参詣、北谷紅葉最中也、竹林房辺歩行、催懐旧也、

（元禄二年十月三日条、妙法院史料第三卷、八十九頁）

又、堯恕は、華藏院より伝聞した良源に関する逸話を、元禄四年（一六九一）七月十七日の日記に書きとめている。このように『堯恕法親王日記』からは、堯恕が堯延の師であり、堯憲と親しかったこと、堯恕が降魔大師を信仰し、良源に関心をもっていたことが知れる。

『降魔大師縁起』の成立背景を考える時、この時代における縁起絵巻制作の状況や、奥書に見える人物、彼らを取りまく社会環境などについて、今後、より詳細な検討を加える必要がある。

四、内 容

叡山文庫蔵『降魔大師縁起』の内容は、奥書の部分を除き、概ね次に示した五段に分けられる。

①比叡山東塔北谷竹林院の降魔大師の画像は、良源が自ら描いた折に、画像からひとりで眉毛（「降魔の毛」）が生え、るといふ靈験があり、「降魔大師」と呼ばれるようになった。そのように靈験あらたかな画像である為、今に至るまで尊崇し、月毎に各房へ巡らせて、順次に執事し、供養申し上げている。（L2～L15）

②楞嚴院の慈恵大師画像は、俗諦を表とし真諦を裏とする為、出家も俗人も参詣し、宝前はいつも賑わっている。一方、北谷の降魔大師画像は、真諦を表とし、俗諦を裏とする為、学道の志がある人々が特に尊崇し、常に閑静な様子で奉仕されている。（L17～L27）

③元亀の法難（織田信長の比叡山焼き討ち）により、延暦寺の堂舎仏閣は悉く灰燼に帰し、仏像・経巻・宗門の記録も地方へ散逸した。寺の荒廢により、山住みの僧侶もなく、比叡山は仏道修行の場ではなくなってしまった。（L29～L46）

④降魔大師画像帰山に関する靈験談。

a 慈光院重順が、元龜の法難より十二年を経て帰山し、房跡などを再興した。しかし、降魔大師画像の行方が不明であり、常に恋慕の思いで過していた。
(L 48～L 53)

b ある夜、重順は大師より「肥前国背振山五戒房という僧のもとにいる。急いで迎えに来るように。」という夢告を受ける。しかし、中々下向出来ずに月日を送っていた。すると、大師は再度夢に現れて「急いで迎えに来るように。」とお告げになった。そこで、重順は急ぎ肥前国へと出発した。
(L 53～L 64)

c 重順が肥前国に下向する途中、摂津国富田で休息を取ったところ、そこで背振山の五戒房と出会った。重順が夢告について語ると、五戒房は京都巡礼の折に、書店で降魔大師画像を手に入れたこと、大師の夢告を得て、比叡山へ戻すべく画像を背負い、上京してきたことを告げる。そこで、共に帰山し、降魔大師画像を不動院へ遷座した。後に房舎が次第に再建されたので、元のように、各房へ順次巡らせた。
(L 66～102)

⑤ある時、竹林院の稚児が降魔大師画像の眉毛を払い落してしまった。執事の僧は驚き、御眉毛を取り厳封し、画像の箱の中に納めておいたが、いつの頃か紛失してしまった。稚児が画像の眉毛を払い落としてより夢告があり、竹林院には画像が巡らなくなってしまった。
(L 104～117)

本縁起では、先ず、降魔大師画像の由来と画像に対する信仰の様子(①・②)について述べる。その後、元龜の法難によって、肥前国背振山へ散失していた降魔大師画像が、比叡山に帰山するという話題(③・④)が続き、最後に画像に関する後日談(⑤)が語られ、縁起は閉じる。中でも、本縁起の中心となる話題は、④の画像に関する霊験談で、より多くの筆が費やされている。内容に関しての詳細な検討は後に譲るが、本稿では、いくつかの気に掛かった点について、以下に述べる。

冒頭話題①には、降魔大師画像の由来と、画像を各房に巡らせて供養したことが示されている。この画像については、

『比叡山堂舎僧坊記』（天台宗全書第二十四卷、天台宗典刊行会編、第一書房、昭和四十九）北谷八部尾の項に、次の記述がある。

一、降魔大師 慈恵大師也。御自筆繪像画影之後降魔之眉毛自生。依之奉名爾。当尾坊中限一箇月輪番奉守。旦夕之勤行。日供。夜燈。毎月三日式日之御講。至于今無退轉。天下安全之旨奉祈者也。往古者尊像之箱賜勅符。毎年正月十八日勅会之人講有之（由申伝）
（二八九〜一九〇頁）

まず右の記述には「御自筆繪像画影之後降魔之眉毛自生。」とあり、より簡略ではあるが、大師の画像から降魔の眉がひとりで生えたという、本縁起と同一の靈驗談が示されている。次に「当尾坊中限一箇月輪番奉守。」以下には、降魔大師画像を月毎に輪番して、朝に夕に供養したことが記されており、本縁起の記述と対応する。『比叡山堂舎僧坊記』の最も古い奥書には、寛文四年（一六六四）とあることから、本縁起成立以前より、このような伝承があったことがわかる。又、この画像で特に注目されるのは「降魔の毛」と称される眉毛であろう。⑤においても、稚児が画像から眉を払い落とした為に、竹林院へ画像が巡回しなくなった、とあり、降魔大師にとって、眉は特別な意味を持ち、重要視されていたことがわかる。ちなみに、良源の姿を描いた護符は数種類摺られているが、その中に、片方の眉が触覚のように長く描かれているものがある。護符の図柄に描かれていることから、「降魔の毛」と称される特別な眉が、常ならぬ力の象徴であったことが窺える。

②には、楞嚴院の慈恵大師画像と、竹林院の画像が対比され、それぞれに対する信仰のあり方が述べられている。楞嚴院の慈恵大師画像は出家も俗人も参詣し、宝前は常に賑わうが、竹林院の画像は学道を志す人物が参詣し、奉仕も微音で静かに行わなければならない、とある。同じ慈恵大師良源を描いた画像でありながら、信仰を捧げる人々や信仰のあり方に差異がみられ、興味深い。なお、例えば『江戸名所図絵』には、上野寛永寺に伝わる画像に対する信仰の様子が記述さ

れているが、「熱鬧にぎやかの中最も首なるべし」^⑥とあり、楞嚴院の慈恵大師画像に対する信仰のあり方に近いようである。今後、慈恵大師信仰のあり方についての全貌を知るためには、『降魔大師縁起』なども含めた網羅的な研究が必要であろう。

④は肥前国背振山へ散失していた降魔大師画像が、比叡山に帰山するという話題で、降魔大師の夢告による靈験談が中心となつて、話題が展開する。まず、失われた降魔大師画像を恋慕する重順の夢に大師は二度現れ、「肥前国背振山五戒房のもとにいますので、迎えにくるようにな。」と述べる。重順は、下向の途中、摂津国富田で五戒房に偶然出会い、五戒房も又、大師の夢告を受けて上京していたことを知る。そこで共に帰山し、降魔大師画像を安置することになる。さて、この話題で注意されるのは、重順や五戒房の夢に、良源自身ではなく、画像として描かれた降魔大師が現れ、帰山を訴えたという点である。画像が意志を持って夢告し、自らの意志を遂げるという点に、本話題の面白さがある。又、⑤においても、大師の画像は夢告によって「竹林院へは行かない」という自らの意志を示し、結果、竹林院へは巡回しなくなった、とある。本話題のように、画像や仏像が意志を持ち、現実の人間に指示を与え、自らの意志を遂げるといふ説話の話型は、他の縁起（善光寺の略縁起等）にも見える。

以上、『降魔大師縁起』について概略を述べた。今回は触れていないが、内容にかかわるものとして、降魔大師画像が一時安置されていた背振山の信仰に注目している。江戸期の地誌である『肥前古跡縁起』（大木英鉄著、寛政五年、一六六五成立）巻上「背振山」の項には、背振山に、伝教大師制作の薬師仏が安置されており、弘法・智証・慈覚だけでなく、慈恵大師が入唐求法を祈り、大願を果たした^⑧、とあり興味深い。（ちなみに、良源は実際、入唐求法していない。）背振山の信仰・伝説を含めた諸問題について今後考察する所存である。

【注】引用文の字体は、概ね通行のものに改めた。

引用文中の傍線・網掛は、畑中が付した。

- (1) 村山修一「慈恵大師の信仰」(『古代仏教の中世的展開』、法蔵館、昭和五十一年、六十一〜七十五頁、※初出、昭和二十九、『比叡山 その歴史と文化』、星野書店)

「現在叡山にある『降魔大師縁起』は一巻本で、最順已講が發起し、堯恵(堯憲カ、畑中注)大僧正等を動かし、宝永三年(一七〇六)十月作成し、翌四年二月三日、座主二品堯延親王が揮毫せられたものであるから、これとは系統を異にする絵巻である。」
村山氏が「これ」と述べられた絵巻とは、『看聞御記』に「法輪院慈恵大師御経三巻持参青蓮院御絵也、自第四詞紛失不被出」と記される絵巻をさす。

- (2) 『国書総目録』には「叡山(一軸)・明德院無動寺(一冊)」とある。

- (3) A本の29行目と30行目の間にも、約一行分の余白が見え、空白の位置がB本の注記と不一致である。しかし、この場合は当該箇所が紙の継目であることから、絵の挿入を想定しての空白ではなく、紙継ぎによる余白と考える。

- (4) 榊原悟「住吉具慶研究ノート 延宝七年『元三大師縁起絵』製作をめぐる」(三彩社『古美術』、七十三号、昭和六十、二十九〜五十六頁)

- (5) 『堯恕法親王日記』元禄四年七月十七日条(妙法院史料第三卷、吉川弘文館、昭和五十三年、一五八〜一六〇頁)

- (6) 『江戸名所図会』(日本風俗名所図会、角川書店、昭和五十五年、四二〇頁)

- (7) 中野猛編『略縁起集成』第一卷(勉誠社、平成七、八十五〜九十一頁)

- (8) 『肥前古跡縁起』(肥前叢書第一卷、昭和四十八、青潮社、三九六頁)

五、翻刻・対校

- A本を底本とし、A本については、仮名遣いや改行は元のままとし、行番号を五行毎に付した。
- 私に句読点及び会話等を示す「『』」を施し、字体は概ね通行のものに改めた。
- 当該箇所文字が無い場合は、「・」で示した。
- A本において、一行空白がある場合には「(一行空白)」とし、B本に記述がある場合には、その旨を下に注記した。
- 校異については、異なる本文に傍線を付し、(B「く」)として、本文の右に示した。
- 誤字かと思われる部分には傍点を付し、下段に※として注記した。
- 誤読の可能性があり、今後の補訂を期したい。

降魔大師縁起

延暦寺東塔院北谷の降魔大師

(B「の」ナシ)

は、慈恵の尊像也。そのかみ、大師ミツ
から此像をえかきたまふ折ふし、

5 阿闍梨公かたはら(B「はわ」)におハしまして、

「降魔の毛をあそはされさるや」と

のたまひし時、大師かさねて御筆
をとらせたまふとひとしく、御絵像

より自然に一寸あまりの眉毛

10 出生せり。このゆへに降魔大師

とて、今にいたりて崇奉し、房(B「三」)

月くにくらして、巡次に

執事し、朝暮の勤行をこ

たらず、恭敬供養したてまつる。

15 今の竹林院、その旧跡なり。

〈一行空白〉(B「此間に絵あり」)

おほよそ仏菩薩各々の本願まし

ますかゆへに、垂迹示現また表裏

あり。楞嚴院の大師ハ、俗諦を表

20 とし、真諦を裏としたまふによりて、

道俗群参し、宝前つねに繁華(B「花」)なり。

北谷の大師は真諦を表とし、俗諦

を裏としたまへは、学道のこころさし

ある輩、ことに尊崇したてまつる。

25 憤鬧をいとひ、閑静をこのみたまふ

により、論議決択の外ハ、誦経誦呪

にいたるまで、微音にいたすことなりとぞ。
(B「いたす」ハ小字ニテ「音」ト「」ノ間ニ書入

•••••
(B「此間に絵あり」)

元龜二年のミたれに山門滅亡

30 し、堂舎仏閣・ことくく灰燼となり、
(B「も」)

博覽高達の老宿、辺鄙に流浪

せしかは、四教五時の花もちり、三諦

即是の月もくもれり。すへて

一山の仏像、経卷、宗門累代の
(B「の」ナシ)

35 記録、諸国に散失して、

おほく田舎の宝とそなり

ける。

〈一行空白〉(B「此間絵あり」)

それより後、次第にあれば、

40 山住の僧侶もなく、振鈴の音たえて、
(B「へ」)

南無とゝなふる人もなく、谷々の講演

摩滅して、も・の行法も怠転す。
(B「と」)

修学の窓をとちて、坐禅の床を

むなしくせり。重門四廊礎而已

45 をのこして、さなから鹿のふしと

(B「と」ナシ)
とそ成ける。

〈一行空白〉(B「此間絵あり」)

後十二年をへて、慈光院重順と

いふ人帰山し、日吉三宮社神輿

50 ならひに山上妙見堂、竹林院、不動院、

慈光院の房跡などを起立せしか

とも、大師の御在所しれかたく、恋慕

やむときなし。こゝに或夜夢中に

大師つけたまはく「われ今九州

(B「の」ナシ)

55 肥前の国背振山五戒房といふ僧の

もとにあり。いそきむかへたてまつる

(B「な」)

へし。」と。重順奇異のおもひ・をなし、

下向の企をなしゝかとも、時縁に

さへられ、因循して月日をく

60 りけるほとに、又ある・夜の夢に

(B「の」)

「何とてをそきにか。はやく迎へし。」

(B「にか」ハ小字ニテ注記)

との給へり。いよく奇特の思

をなし、すなハち肥前の国へそ

下向しける。

65 へ一行空白 (B「此間に絵あり」)

(B「賀助」)

冥助にや有けむ。くたりける道撰津

の国富田の辺にて、あやしの小家の

有しに、なにとなく入やすらひたき心

いてきて立よりけるに、遠国より

70きたるとみえて(B「へ」)そ、僧一人やすみゐたり。

此僧、重順にむかひていひけるハ「御辺(B「へ」)

は京都よりくたられしとみえたり。

山門再興あるよし、いかゝおはしますや。(B「つす」)と

とひけれハ、重順「ま・とに再興とはあれとも、(B「へ」)

75いまたはかくしくもさふらハす。御房ハ

山門へのごとろさしにてのほらるゝや。

いつれの国、いつれの寺の人ぞ。」と尋しに、(B「尋」)

此僧、肥前国よりのほるよしこたへけれハ、

あやしく思ひ「もし、背振山の五戒房

80などにてハましますや。」とひけれハ「いかにも

我は五戒房なり。」とこたへけり。重順かさね

て「我は本山北谷の慈光院といふ僧

なりしか、しかくの告ありて、大師の像を

迎にまいるなり。」といひけれハ、此僧手を

85うちて「今わかおひたてまつるところの

一軸、すなハち大師の尊像なり。われ京

都巡礼の時、京極通の書肆にして、(B「り」)

はからさるに此尊像をもとめ得たり。

うれしくおもひ、(B「へ」) 本国に下向して小堂

90をいとなみ、安置したてまつり、年月を

経にきたるところに、或夜の夢に『我は

もと本山北谷のめぐり大師なり。今

再興あり。はやくをくりかへす

へし。』と告(B「告」)たまふ。これによりて、たゞいま

95本山へもりまいるなり。」とそかたりける。

山上にて重順夢みしと、月日符合

せしかは、そのよしをかたり、たかひに

感涙をなかし、うちつれてかへりぬ。

坂本に一宿し、翌日不動院へ遷

100座し、それより次第に房舎造立

ありしかは、もとのことく巡次に

めくらしたてまつる。

〈一行空白〉(B「此間に絵あり」)

或時、竹林院にて児ともあつまりて、

105手まさくりのつゐ(B「て」小字ニテ注記)てに、御眉毛を払ひ

おとせり。執事の僧おとろきて制(B「て」ナシ)し

つれとも、すへきやうなくして、御眉毛を

とり、ふかく緘し、御絵像箱の中に

おさめをきけり。元和の比まであり

110 けるか、いつのほとにか紛失してけり。

等覚無垢の位までも、往因たかは

さるいハれなれハ、此兒、往昔の因縁

やありけん、これをおとしたてまつる

こと、隨機示現出没動靜、凡情を

115 もてはかりしるへからす。これより

夢の告ありて、竹林院へのミ今

にめぐりたまハさるとなり。

（一行空白）（B「此間に絵あり」）

（B「住吉法眼具慶末弟 長谷川常貞図」）
.....

120 右縁起の趣ハ、先達のかたり伝へ

しとて、最順已講口説也。最順

は、重順直弟俗姓の甥にて、平生

その言談に熟せり。重順ハ、江州
（B「は」）

蒲生郡古川村木村氏某云々。今年

125 冬十月、最珍法印勸発により、

鄙語をつゝり一卷となす。堯憲

はしめ竹林院兼帯住職三十

年におよへり。芳縁くちす、今此
（B「今」）

挙にあつかる。願はくハ、此功に

降魔大師縁起一卷、依

130 ことへて、慈恵鏡潤冥頭の

※「鏡」ノ誤字カ。

135 衆望満禿毫畢。

利益に預らん事を。穴賢。

(B「預し」)

宝永四年二月三日。

宝永三年十月。

天台座主二品判親王書。

(B「判」ナシ)

前大僧正堯憲。

付記 本稿を記すにあたり、叡山文庫様には大変お世話になりました。記して深謝申し上げます。

(京都女子大学大学院研修者)